

アウトリーチから児童生徒の文化芸術鑑賞機会への発展～アウトリーチをアウトリーチで終わらせない～

児玉孝文（宮崎大学産学・地域連携センター）

矢吹修一（いわき芸術文化交流館アリオス）

1. はじめに

本研究の目的は、文化庁事業「文化芸術による子供育成推進事業」の芸術家の派遣事業（学校申請方式）（以下、派遣事業という）における舞踊分野（特に、創作ダンスと親和性の高いコンテンポラリーダンス）の実施数の増加を図り、子どもたちが多彩で豊かな文化芸術鑑賞・体験に資することである。さらに、派遣事業を、振付家・ダンサー（以下、芸術家）が次の土壌を耕すための資金を獲得する“創造的循環”（文化芸術のエコシステム）の場とすることである。その目的を達成するために、学校及び芸術家から、いわき芸術文化交流館アリオス（以下、アリオスという）が実施した、アウトリーチ事業から派遣事業に繋げた取り組みを考察し、その成果を明らかにする。

2. 文化芸術による子供育成推進事業-芸術家の派遣事業-（学校申請方式）

令和4年度の派遣事業の採択件数は1711件。舞踊分野は201件。その内、「んまつーポス」をはじめとするコンテンポラリーダンスの分野で活動する芸術家の派遣は34件。全体のわずか2.0%である。2018年の1.8%（「文化芸術による子供の育成調査研究」2018.3）から微々たる増加である。この要因について学校関係者へ聞き取り調査を実施したところ、コンテンポラリーダンスの芸術家を知らない、地域にコンテンポラリーダンスの芸術家がない、そもそもコンテンポラリーダンスがわからない、文化庁が認証した派遣芸術家の名簿等にアクセスができない、子どもたちに相応しい芸術家を選ぶのが難しい、等の回答が得られた。改めて、学校におけるコンテンポラリーダンス及び芸術家の認知度の実態に気付かされた。

3. おでかけアリオス「んまつーポス身体表現ワークショップ」から派遣事業へ

2013年にスタートしたアウトリーチ事業「んまつーポスの身体表現ワークショップ」は、市民の声（事業の公平性等）から2021年度で終了となった。しかし、継続実施や新規の実施を望む学校・教員も多かった。そうした学校・教員及び「んまつーポス」に対し、アリオスは、一部の学校で試行していた派遣事業への移行を提案・実施した。実施にあたり、派遣事業の説明、実施希望校の取りまとめ、「んまつーポス」との調整、申請書の作成のための助言等、コーディネーターとしての役割を積極的に担った。その結果、学校・教員からは、派遣事業の移行に対する不安が払拭された、煩雑な申請書の作成がスムーズだった、計画的かつ継続的な教育課程を編成することができた等の声が届いた。また「んまつーポス」からは、「アウトリーチの新たな需要（派遣事業）を作り出すモデル」という評価を得た。そこで今年度は、演劇分野のアウトリーチ事業についても同様にデザインし芸術家を派遣した。

4. おわりに

アウトリーチ事業は予算の関係で実施数は限られ、毎年同じ学校で実施することは難しい。しかし派遣事業で不採択になるケースは少ない。アウトリーチ事業から派遣事業へ繋ぐことは、「文化芸術立国中期プラン」（2014.3）が目指した「義務教育期間中に毎年1回以上は、芸術文化の鑑賞・体験ができるような環境を整える」に資することになる。さらに、積極的に学校と芸術家とを出会わせ、芸術家の“創造的循環”に対する意識を高めることも可能となる。荘銀タクト鶴岡（山形県）のように、公共文化施設等のスタッフの専門性を派遣事業で活用したアリオスモデルに注目し、後に続く公共文化施設も現れている。令和5年度の派遣事業は、同一分野での申請は控える、教育委員会も介在しない等、実施方法が変更となる。これらの変更点を注視しつつ本研究を継続させたい。